

第90回 歴史リレー講座「葛城と大峰 ―山岳修験の世界―」 森下 恵介氏 (R4.3.20)

「山の考古学」というのは、人と山との関係を考古学的に明らかにするというのが目的で、私は奈良の都、平城京の発掘調査に携わっていましたが、都というものが都とは何かを理解するためには、まずその対極にある山というものを理解する必要があると考えています。

奈良県はその面積の約80%近くを山地が占めています。山は水源であり、木材、動植物、鉱物をはじめとする自然の恵みを与えてくれます。人々が自然とともに生きた縄文時代においては、こうした自然の恵みを与えてくれる山は神そのもので、日の出や日の入りによる季節の変化を教えてくれる存在でもありました。

弥生時代というのは稲作農耕が始まる時代ですが、これまでの森林が農地に開発されることによって、この時代から日本列島の自然は人間によって急速に改変されて行きます。稲作農耕にとって山は天に近く、農耕に不可欠な水源の地であり、山を志向して埋納されたとみられる銅鐸や銅剣などはこうした山の祭祀と関わる可能性も考えることもできます。

現在も古い信仰の在り方を伝える三輪山では、古墳時代の祭祀遺跡は山麓にあり、山麓から子持勾玉（豊穡のシンボル？）やミニチュア土器などの祭祀遺物が多く出土しています。三輪山のような秀麗な姿の「神奈備山」や突出した岩峰、奇峰、双耳峰、火山、高山は神の居所と観られたようです。

こうした山々は神の領域であり、人間がむやみに立ち入る場ではないと考えられ、むやみに立ち入れば神の怒りを招き、祟りとして災害が起こると考えられたようです。山への立ち入りは神祇の際の限られた神に仕える人々だけに限られたようです。古代の山は女人禁制どころか俗人禁制でした。江戸時代の北海道のアイヌの人々は山に登っても、その頂だけはけっして踏むことはなかったそうです。

ところが7世紀末ごろから8世紀、「都」というものができる飛鳥奈良時代になると、山へ入り込み、山頂へ至る人々が現われます。仏教の山林修行や道教の「仙」の影響もあって、神仏の坐す世界に入り、神仏に近づくことにより、その力を得ようとしたと考えられ、この山での修行によって得られた験（しるし）が「験力」で、験を得るための修行が「修験」ということになります。この点で、「修験」は「山岳信仰」とイコールではありません。この修験道の開祖は『日本書紀』にも登場する役行者（役小角）とされます。おそらくはこの時期に山に入って行った宗教者、求法者を象徴化した人物とって良いかと思います。五穀断ち、薬食、座禅、瞑想、写経、水行、回峰行などが山で行われたのですが、修行の結果、得られた「験力」というのは体力、精神力の他、特に重要だったのは薬草の知識。天皇や貴族が最も修験者に期待したのはこの病気を治す力、「看病禪師」としての能力でした。全国の霊山はこの時期に文字通り「開山」と呼ばれる仏教者によって登頂され、「都の寺」を補完する存在として長谷寺、壺阪寺などの「山の寺」が成立し、山林修行地と山岳信仰が一体化し、病の治癒と薬師如来、水源と関わる観世音菩薩がこうした「山の寺」に祀られました。義淵僧正の弟子とも伝える奈良時代の行基、^{げんぼう} 玄昉、^{ろうべん} 良弁、道鏡なども山林修行僧で「看病禪師」でした。

古く「^{かねのみたけ}金峯」と呼ばれた金峰山の山上が大峰山と呼ばれる山上ヶ岳、その山下が吉野山です。山上ヶ岳山頂からは奈良時代の須恵器、奈良三彩陶器、和同開珎などの出土が確認され、8世紀に山頂祭祀が行われていることが確認できます。また、ガラス製経軸や大峯山寺梵鐘の存在は奈良時代に山頂に堂舎が存在したこともうかがわせています。こうした8世紀須恵器片の散布は弥山、八経ヶ岳までは確認できますが、それより南では確認できず、吉野が「大峰奥駟道」によって熊野と繋がるのは、12世紀以降とみられ、この頃に修行のあり方も山中での参籠から回峰、巡拝に重点が置かれるようになり、いわゆる「修験道」が確立していくようです。和泉山脈と金剛葛城山地を修行の場とする「葛城修験」も大和の金剛葛城と和泉、紀伊の神仏の坐す霊地が法華経二十八品の二十八経塚として整理統合されたもののようです。

自然災害の多い昨今、過去の人々に学び、まずは自然に打ち勝つといった思い上がった考えを棄て、山や自然を畏れるといった謙虚な姿勢を持つことこそが今、求められるのではないのでしょうか。